

世界観認識の混在から分離へ

― 文学研究と文学教育の交差研究の徹底化のために ―

李 勇 華

(受理日二〇一九年十月三日)

1. ポストモダンについての(再)定義

ほぼ二十年前から、田中実が『小説の力』と『読みのアナキーを超えて』という二冊の著作を出した後、総論〈本文〉とは何か プレ〈本文〉の誕生(『新しい作品論』へ)、〈新しい教材論〉へ(『1』所収)、『原文』という第三項(『文学の力×教材の力 理論編』所収)などの論文を著し、文学研究と文学教育の交差研究を展開していた。その一端は相次いで国語教育と文学研究のメンバーを集めた鼎談からもうかがえる。なぜ、このような交差研究が必要なのだろうか。それは文学研究にとっては二〇世紀六十年代以後、舶来の数多の文学理論のなかで一体どのような理論を使えばいいのか、それを決める基準が文学教育に求められるからである。一方、文学教育にとっては文学研究を通して「鎖国」的な研究を避けることができるのである。「文学の終焉」が喧伝されている今日、このような交差研究はさらに徹底化されるべきであろう。

ポストモダン思想が下火に入った今、そもそもポストモダンとは何かということをやややく総括できる時期が来ていると思われる。もし、ジャン・フランソワ・リオターの『ポスト・モダンの条件』などに依拠せずにポストモダンを(再)定義するならば、次のようなことが言えるのであろう。すなわち、ポストモダン

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員…難波博孝(主任指導教員)、山元隆春、山内規嗣

とは反映論と田中実によって首唱されている〈第三項〉論という二種類の世界観認識の混在である、ということである。

これから本稿で取り上げようとするロラン・バルトもそうであるが、いわゆるポストモダン思想家たちの思想発展は常に変わりつつあったという特徴がある。それは反映論から離れ、反映論と違う何かの世界観認識を手に入れるに至るまでの徴候である。このようなことを念頭におけば、ポストモダンはさらに次のような二つの部分に分けて考えられる。一つは、バルトなどのポストモダン思想家の発展中の思想であり、もう一つは、彼らの思想に対しての断片的な受容である。そもそも、田中実によって展開されている文学研究と文学教育の交差研究の目論見は既存の文学研究と文学教育を確認することにあらず、ポストモダンを通過した以後の地平から新しい文学研究と新しい文学教育を提起しようとするにある。しかし、ポストモダンを通過できなかったのが文学研究と文学教育の現状ではないか。文学研究と文学教育の交差研究の徹底化のために、ポストモダンに混在している世界観認識を分離することが必要である。

このようなことを明らかにするために、本稿ではまず思想発展中において見られる世界観認識の混在についてバルトⅡ期を通して確認してみたい。次に、自らがポストモダンを通過できなかったことに気づかなかったツヴェタン・トドロフと丹藤博文の文学教育論について批判的に分析してみたい。それぞれフランスと日本の文学教育に一定の影響をもつ彼らは各自の立場から現在の文学教育を批判したが、しかし彼らの批判自体が再批判されることがなければ、かれらの文学教育論に混在している世界観認識を分離することができない。本稿の最後に、〈第

三項〕論から文学を読めばどのような文学の価値を引き出せるのか、教育の原理を問いつつながら、改めて魯迅の『故郷』を例にして考えたい。

2. バルトのテクスト概念についての検討

周知のように、バルトはカミュなどの実存主義者作家に刺激されて、一九五三年に『エクリチュールの零度』を出して彼の学術的生涯を開始した。ところが一九六八年の前後から、バルトはエクリチュールだけではなく、テクストという言葉をも使い始めている。テクストとエクリチュールとは一体どのような関係にあるのか、という問題はこれまでのバルト受容においてはあまり突き詰められていなかった。書く行為に焦点化した『エクリチュールの零度』のバルトと違って、この時期のバルトは作家の書く行為より読者の読む行為を中心に思想を展開している。そこで、エクリチュールは作家の書く行為ではなく、作家の書かれたもの、つまり読者に読まれる対象としてまず考えられる。ただし作家がエクリチュールから隔離されることが前提とされている。この角度からバルトはエッセイ「作者の死」〔『物語の構造分析』所収〕のなかで改めてエクリチュールについて定義したのである。

というのも、まさにエクリチュールは、あらゆる声、あらゆる起源を破壊するからである。エクリチュールとは、われわれの主体が逃げ去ってしまう、あの中性的なもの、混成的なもの、間接的なものであり、書いている肉体の自己同一性そのものをはじめとして、あらゆる自己同一性がそこでは失われることになる、黒くて白いものである (1979: 79-80)。

右の引用にある論点はすでに「作者の死」の前に書かれた「物語の構造分析序説」で主張されているにもかかわらず、両論文の間に明らかに飛躍が起きたということが伺える。ここでは論を急ぐより、もうすこしエッセイ「作者の死」前後のバルトの思想発展における変化について整理してみたい。

言語学をモデルにして物語の「文法」を分析した「物語の構造分析序説」において考察された単位は「文」である。「文」は人格のある作者によって書かれたものではなく、発話行為のなかで語り手によって語られたものである。ここでは生身の「作者」と語り手の区別はされているが、「作者の死」はまだ宣告されていない。「作者」のことはあくまでも恣意的に不問に付されたにすぎない。

そこで、一九六八年の「言語学と文学」〔『ロラン・バルト著作集6 テクスト

理論の愉しみ』所収)の終わりに、バルトは「現在、言語学が作品を時代遅れにしつつあるように、テクストが言語学を時代遅れにしてしまうであろう」(2006: 14)と書いて、「物語の構造分析」から「テクスト分析」に切り替えた。そして一九七一年の「天使との格闘」〔『物語の構造分析』所収〕の冒頭でバルトは同じ論点を繰り返して、「物語の構造分析はたしかに科学ではないし、学問でもない」〔ここで提出された構造分析は、あまり純粋なものではない〕(1979: 56)と断っていた。言い換えると「テクスト分析」は「不純」な構造分析である。

具体的にいうと、「物語の構造分析」においては「作者」あるいは「作者」概念を支える反映論のような世界観認識が一時に括弧に入れられたが、「反映論の代案としての世界観認識はまだ提出されなかった。これに対して、「テクスト分析」においては反映論の代案としての世界観認識が萌した。この新しい世界観認識のもとで、言語学は「物語の構造分析」において見られるような役割を果たさなくなっている。つまり、「私」は「文」の主語として扱われることが止められた。主体と世界は、主語と述語の関係ではなく、主体にとって世界は主体の言葉で紡ぎだされたものである。そのような世界の外部に実体概念の客体があるとは考えられなくなったからである。

通常「テクスト分析」に入るまでのバルト思想はバルトⅠ期と言われる。バルトⅠ期において研究された内容は多分野に亘っているが、バルトⅡ期のように世界観認識は問題とされていない。われわれは、とくに「常識」を疑わなくてもバルトⅠ期を読むことができる。ところが、「作者の死」と「作品からテクストへ」を中心にしてのバルトⅡ期は「常識」、いわば反映論のような世界観認識の枠組みのなかで読むことができない。しかし、バルトⅡ期において、反映論と違う世界観認識が萌したが、反映論と関わる内容もまだ見られる。つまりバルト思想発展における世界観認識の混在がまずここに認められる。それについて以下は、具体的にエッセイ「作者の死」に出ている二種類のエクリチュールから考察してみたい。

一つは、前述したように、作家によって書かれたものであるが、作家は恣意的にそこから隔離されるという発想である。

ブーヴァールとベキュシエ、この永遠の写字生たちは崇高であると同時に喜劇的で、その深遠な滑稽さはまさしくエクリチュールの真実を示しているが、この二人に似て作家は、常に先行するとはいえず決して起源とはならない、ある〔記入の〕の動作を模倣することしかできない。(1979: 86)

右の引用によると、読者は自由にエクリチュール、あるいは複数のエクリチュールを切断したり、組合せたりすることによって読者自身の読む対象であるテクストを構成することができる。ここでエクリチュールは実体概念として扱われている。

もう一つのエクリチュールは作家とまったく関係はなく、そこでエクリチュールに「常に先行する」という書く行為は認められない。それはすなわちバルトの言っている「現代の書き手」の書く行為である。

現代の書き手はテクストと同時に誕生する。彼はいかなることがあっても、エクリチュールに先立ったり、それを超えたりする存在とみなされない。彼はいかなる点において自分の書物を述語とする主語にはならない。(1979: 8)

右の引用に区別されているのは、「物語の構造分析」と「テクスト分析」の違いである。「テクスト分析」と比べて、「物語の構造分析」において分析された「私」は「文」の主語であるものの、それがそれを分析する主体に先行するものである。それに対して、「テクスト分析」の「現代の書き手」によって説明されているのは、読者の読む行為に伴って読まれる対象が現れてくるということである。読者はあたたかも読者自身の読まれる対象の「作者」のようなものとなっている。この「作者」こそバルトに「現代の書き手」と呼ばれている。ここでは、読者に読まれる対象としてのテクストはエクリチュールに由来するものであってもそれは先ほど言及した実体概念のエクリチュールと明らかに異なっている。

エッセイ「作者の死」の終わりに、バルトは「現代の書き手」によって齎されたエクリチュールが実体概念のエクリチュールに回収されないように、念のために「読者とは、歴史も、伝記も、心理もまたない人間である」「作者の死」(8)と書き加えている。いうまでもなく、「歴史も、伝記も、心理もまたない人間」としての「読者」はあり得ない。反映論から離れているものの、それと違う世界観認識を手に入れていないバルトにとって、これはあくまでも暫定の考えとして書かれたものである、と考えるてもよからう。この「読者」概念に確かに「物語構造分析」が落とした影が見えるが、そのように捉えることができないうのは、この「読者」概念を梃にして、バルト思想は「テクスト分析」から「物語構造分析」へ戻るのではなく、「テクスト分析」以後、つまり「明るい部屋」を中心とするバルトⅢ期を切り拓くことができたからである。

かくして、バルトⅡ期にそれぞれ性格の違う二種類のエクリチュールおよびそ

れに由来する二種類のテクストが共存していることがはっきりとみられる。もし、『明るい部屋』などのバルトⅢ期からバルトⅠ、Ⅱ期をとらえ返せば、バルト思想は〈第三項〉論のような世界観認識に向かって発展したということがわかる。バルトⅡ期において、反映論と違う世界観認識を前提にして「エクリチュールとは」黒くて白いものなのである(1979: 8)、および「作品は物質の断片であつて(たとえばある図書館の)書物の空間の一部を占める」(1979: 83)などの文章が綴られたのであろう。白い紙にある黒い印字には何の意味もない。意味は読者の読む行為のなかで読者自身に賦与されるものである。それが読者によって読まれる対象となっている。

3. ポストモダンを通過できなかった文学教育論

3. 1. ポストモダンからモダンに戻ったツヴェタン・トドロフ

3. 1. 1. 文学教育に対してのトドロフの批判
社会主義国家ブルガリア出身で、その後フランスに帰化したツヴェタン・トドロフは、構造主義詩学の主要メンバーとして知られている。彼は二〇〇七年の『文学が脅かされている』のなかで次のように当時のフランスの国語教育の現状に対して批判している。

一九九四年から二〇〇四年まで、複数分野の専門家からなる国民教育省の諮問委員会である学校課程委員になり、フランスの学校教育における文学教育について全体的見通しを持てるようになった。そこで私は理解したのだ。私がつけていたのはまったく異なる文学についての考えが、孤立した何人かの教員の実践だけでなく、文学教育の理論を、そして文学教育を枠付ける公の支持を支えていたのだ(2009: 10)

「私がつけていたのはまったく異なる文学についての考え」と書いてあるが、この考えこそ、かつてトドロフ自身もかわった構造主義詩学のことではないか。後ほどまた触れるが、トドロフは一九六三年にフランスに入った後、一時的に構造主義詩学に熱中したが、その後それを否定する側に立ったのである。ところが、彼自身に否定されようとした構造主義詩学がフランスの中等教育の文学教育に盛んに使われているということを目で確認し、「学科の現状に対し、私は自らを責任ある者と感じねばならない」(2009: 8)と述べた。

ところで、なぜ中高の文学教室では「フォルマリズム」、「虚無主義」、「独我

論」(2009: 25-26)をもって特徴づけられる構造主義を、教えてはいけぬのか。トドロフから見ると、記号学などはあくまでも作品を読む「手段」にすぎず、「手段」の学習が、意味の学習に取って代わるべきではない」(2009:16)、「手段」より、もっと教えなければならぬのは「作品それ自体が語っているもの、作品の意味、作品が喚起している諸世界」(2009:13)である。

それでは、なぜ、フランスの中等教育の文学教育は「手段」に偏っているのか。トドロフの分析によると以下の二つの原因が挙げられる。一つは学校の教師にとつては主観性の強い作品の意義より、記号学などは物理学の規則、公式などのように「客観的」に教えられる。もう一つは、中高で教える国語教育の教師はだいたい大学で文学理論の洗礼を受けたことがある。その意味で「中等教育における教育は高等教育における急激な変化を反映している」(2009:18)。中等教育の教員たちはたとえ大学で教わった文学理論を教えるにしても、「大学で習ったことをそのまま教えるのではなく、それを自分の内に内面化し、外からは見えないう道具とせねばならない」(2009:23)との手続きが要請される。

このように、表面上ではトドロフはフランスの中等教育の文学教育を批判しているが見えるが、実はその目論見が彼自身も参加した構造主義詩学およびそれ以後のフランスに輩出した文学理論に対しての否定にある。トドロフから見ると、これらの文学理論のせいで、文学の価値は引き出せなかったのである。このため、トドロフ自身は文学を愛するために、構造主義詩学を含めての文学理論に主導されている文学研究から離れて歴史研究に切り替え、もっと広義の「文学」を通して、全体主義、民主主義などについての研究に突入した。

3. 1. 2. バルトを捉えそこなつたトドロフ

今日、文学理論に対して批判する人にとつても、文学理論に飽きてしまった人にとつても、トドロフの文学教育批判は極めて好ましいことであろう。ほぼ三十冊を超えているトドロフの著作は世界中に翻訳され、紹介されている。しかし、トドロフの文学教育に対する批判は果たして批判になっているのか疑問である。その批判によってトドロフには隠されているのはポストモダンを通過できなかった自身が見えなくなっている。それゆえに、トドロフは彼の師バルトを捉えそこなつたのである。

トドロフはジェラルド・ジュネットの紹介で、一九六三年の九月からロラン・バルトのゼミナールに出席し、バルトの指導の下で博士論文を完成した。ところが「一九六八年以後は、彼に会わなくなることはなかったが、その回数は次第

に少なくなり、「当時、私は彼とはかなり違った道へと進んでいた」(2009: 94)とトドロフは回想している。トドロフはどのような道へと進んだのか、前述した通りである。言い換えれば、トドロフはちょうどバルトⅡ期が始まった前後、バルトの傍から離れたのである。一九六八年以後のトドロフはバルトの言っていることを「奇説」と見なしに信じてなくなっている。

ここでは、もう少しトドロフによるバルト思想理解を見てみよう。トドロフはかりそめにバルト自身に使われていた「テロリスト」と「エゴイスト」という二つの言葉を使って、バルトの思想を一九七五年の『彼自身によるロラン・バルト』以前とそれ以後という二つの時期に分けて次のように書いている。

一九七五年以前の著作も、思考の師匠のような仕方です。「テロリスト」的であるわけではない。だが、それはやはりそれなりの仕方です。「テロリスト」的である。なぜならそれらの著作は、たとえその当該書物の中だけにしても、あるいはわずか一ページの内部においてだけでも、あるいはある説、ある真理を、断言的な仕方です。奉じているからだ。(2009:102)

「テロリスト」とは、バルトの著作に断言的な仕方です。書かれた「真理」は多くの人々に共有されたいということの意味している。言い換えれば、バルトは他人の「真理」を退けるが、彼自身の言っていることを「真理」として他人に共有してほしかった。ところが一九七五年以後、バルトは「テロリスト」から「エゴイスト」に変わり、つまり、『彼自身によるロラン・バルト』を含めて、その以後のバルトに書かれたものはバルト以外の人々にも共有できるようになっている。それについてトドロフはバルトの晩年「三部作」での主語「私」と時制との組み合わせにおける変遷を通して詳しく分析している。トドロフがその変遷から読み取れたのはだんだん他者をうけいれるようになったバルトの姿である。

それゆえに、バルトの晩年「三部作」のなかで、もっともトドロフに注目されたのは「明るい部屋」である。トドロフによると、人間の書く行為を左右するのは他者との関係である。「幸福に生きられた他者との関係」(2009:105)が、あるいはいいものが書けるという。同じことがトドロフ自身にも当てはまる。つまり、トドロフは他者としてのバルトを受け入れたので、バルトが死んだ後、バルトについて書くことができたのである。トドロフは結局『明るい部屋』から「死んだのは彼の母だけではなかった。死んだのは、数ある受け取り方のひとつにおける彼自身であった」(2009)ということが読み取れたのである。バルト自身の「死」があつてから、バルトは他者に共有できるものが書けたということになる。

ところでトドロフは「明るい部屋」を高く評価しながら、実は「明るい部屋」について理解できなかったということが次の一文によって露呈されている。

彼の最後の著書が「写真について」のものであったことは、たとえ人を欺くような仕方においてだったとしても、私には表徴的なことのように思える。(2009: 106)。

トドロフは明らかに「写真」においては、確実性を証明する能力が、表象Ⅱ再現の能力をうまわまっているのである(1997: 109)という「明るい部屋」にある文章を見落とした。「表象Ⅱ再現の能力をうまわまっている」を含めて、「明るい部屋」に反映論と違う世界観認識に基づいて書かれた内容はトドロフの理解を超えているので、トドロフに「人を欺くような仕方」と見なされた。

『越境者の思想』のなかで、トドロフは忌憚なく「彼は気の利いた言い回しを作り出すのが好きでしたが、今日冷静に読んでみると、それらの言い回しは過剰なものに思えますし、さらには滑稽なものすら思えます」(2006: 108)と述べて、バルトの思想に対して基本的には否定的である。結局、トドロフはバルトのように世界観認識における転換ができなかったので、バルトとともにポストモダンを通過できなかった。それゆえに、トドロフの目に映ったのは、思想の一貫性を欠いているバルト、「奇説」を弄んだバルトである。

3. 1. 3. 途中で止められた「文学」についての定義

一九六八年、フランスで刊行された『構造主義とは何か?』(日本語訳のタイトルは『構造主義 言語学・詩学・人類学・精神分析学・哲学』である)のなかの「詩学」の執筆者はトドロフであった。この著作の一九七三年の改訂版のなかで、「詩学の領野はこんにち、六年前の状況そのままではもはやなく、私自身も相変らず同じ仕方ですべてに接近しているわけではない」、「詩学の現状を報告するために、必要なたびごとに解説に変更を加えた」(1978: 80)とトドロフは断っていた。この改訂版には「私は作者の伝記にかかわる研究は文学的でないとして一挙にしりぞける」、「テキストそのものをして語らしめること、つまり対象への、『他』への忠実、したがって主体の消失という理想」(1978: 91)などのバルトⅡ期を思わせる内容が書かれているが、しかし、「こんにちでは、詩学に結晶した型の研究を文学にのみ留保するいかなる理由も、もはやない」(1978: 156)と書いてあるように、トドロフの「詩学」は「構造」と「歴史」という作爲的な対立(1978: 149)を取り払い、「歴史的詩学」(1978: 151)の方向に向かって進んでいる。看過できないのは、『構造主義』の「詩学」の冒頭と終わりは明らかに矛盾して

いるということである。もし冒頭での断りを守れば、「歴史」との関係を遮断することが要請されるのである。

前述したように、作家の伝記、作家と関連する歴史はすでにバルトの「物語の構造分析」のなかで恣意的に不問と付されている。バルトはそれを守ってバルトⅡ期に入ると、しばらく文学研究を離れたが、結局、また「文学」に戻ってきたのである。バルトの思想発展にとつて、それは必要な「方法論」だったのである。つまり、通常、人々に理解されている文学と歴史ではなく、それと違う「文学」と「歴史」を定義するために必要な「方法論」である。

『構造主義』の「詩学」までのトドロフは、ミシェル・フーコーの言っている「言説」などのアプローチから、すでに通常の文学概念を揺るがしたのみならず、フレーゲの論理学を踏まえて次のようなことを書いている。

文学は科学のこととは逆に、偽りであることができるかあるいは偽りであらねばならぬことではない。文学のこととはまさに真実の試練にかけられぬことばであり、真でもなければ偽でもなく、真偽問題を提起することには意味がない。このことが文学のことばの「フィクション」資格そのものを定義する。(1978: 106)

ほぼ四十年後、リチャード・ローティの文学についての識見に惹かれて、次のようなことを書いている。

このような学習は(小説の読書を指す)引用者、われわれの精神に含まれるものを変えるのではなく、むしろそれを含む精神を変える。知覚された事物ではなく、むしろ知覚装置自体を変えるのだ。小説がわれわれに与えるのは新しい知ではない。(2009: 62)

右の引用に書いてある思想に据えて、さらに一歩踏み出せばバルトⅢ期および〈第三項〉論の領域に入れるが、しかしトドロフは「語りの「品詞」を例証」(1978: 39)する構造主義詩学に耐えられずに、バルトⅡ期からバルトⅠ期に戻るのみならず、バルト全体を否定し、結局、構造主義に恣意的に不問と付された歴史に戻ってきた。それ以後、トドロフはたしかにもっと広い範囲のなかで、「虚構のものではない」「非文学」(2008: 73)を含めて文学を考察したがしかし通常の文学概念は無傷のまま守られていた。

この「歴史的詩学」の方向では、トドロフにとつて、模範としてみなされるのはポール・ペニシユである。ペニシユとバルトはトドロフの「人生に大きな影響を与えたふたつ」の人物である(2009: 94)。「まず手始めに、可能な限り完

全な資料集めをせねばならない」(2009: 114)と書いてあるように、ペニシュエに駆使されたのは文献学のような方法である。「彼の関心を引いているのは思考の歴史、社会と作品の関係ではなく、むしろ詩の言葉遣いそのものであり、時代を通じて変化しない詩の形式である」(2009: 112・113)とトドロフは言うが「詩」について特に特別な定義をしたわけではない。

トドロフは従来の文学概念のなかにとどまっているので、どんなに言葉を変えて文学の重要性を強調しても、文学の愛好家、一般論以上のことを見せてくれない。文学には何ができるかということの説明する時に挙げられたのは、ワズワースの詩集を読んで鬱病が消えたスチュアート・ミルという例である。それだけでは、たとえば音楽を聴いて鬱病が消えるという可能性を排除しきれないであろう。原理的には、文学と音楽、あるいは絵画と同じであるが。

3. 2. 丹藤博文の文学教育論に対する批判

3. 2. 1. 生身の語り手の機能は〈機能としての語り〉ではない

田中実はずで「近代小説」の神髄は不条理、概念としての〈第三項〉がこれを拓く―鷗外初期三部作を例にして―という最近の論文のなかで「補説」の形で、丹藤博文の『ナラティブ・リテラシー』を取り上げて批判的に検討した。それによると、丹藤の言っている「複数性」は「肝心のバルト自身の退けた「容認可能な複数性」の範囲に収まり、「爆発」「散布」の「還元不可能な複数性」との対峙がありません」、また、丹藤の言っている「異質な他者」は田中の用語でいえば「わたしのなかの他者」に過ぎず、了解不能の《他者》ではない。要は、丹藤は特に田近洵一の抱えた矛盾を突破することができなかった。すなわち「一方で読みのアナキーを標榜しながら、他方で読めると主張する原理的矛盾」(2018: 7)である。

私見では、丹藤のたどり着いているナラティブ、あるいはナラトロロジーはバルト1期を超えていないとするが、丹藤は「言語論的転回」を強調している。もし、「言語論的転回」が世界観認識における転換を前提とするものであれば、丹藤の文学教育論に二種類の世界観認識が同居していることになる。その間の関係がまず説明されるべきである。しかし、私見では、実際のところ丹藤は「言語論的転回」に求められる世界観認識における転換はなかったし、「言語論的転回」についての理解は適切ではなかったのだ。丹藤に二種類の世界観認識が同居すること自体はあり得ないのである。以下は田中になされた批判を踏まえて、具体的に二つの証拠を挙げて論を進めよう。

まず丹藤の『故郷』論(『文学教育の転回』所収)のなかで理解されている語り手の機能は〈第三項〉論の機能としての語りと明らかに異なっている。『故郷』の「私」が「消極的であるとか、「自己認識」が欠けているとはまったく思わない」(2014: 147)と丹藤は述べて「故郷」の語り手でありながら、登場人物である「私」を「実体化するばかりでなく人格化さえしている」(2014: 147-148)という『故郷』の先行研究を一蹴した。その理由について「機能としての語りを読む。このことが、これまでの教材『故郷』論に決定的に欠落していたのである」(148)と丹藤は書いている。そこで田中の『故郷』論から引用しながら「語りの機能がどのような効果あるいは行為性を獲得しているのか」(2014: 149)ということ进行分析したのである。丹藤自身は田中のように山鍵括弧の付いている〈機能としての語り〉という言葉を使っていないので一体どのように語り手の機能を理解したのか、次の一文を見ながら確認してみよう。

〈故郷〉も〈旧友〉も二つとも失われなければならない「私」の「寂寥」は推し知るべしである。その心情の深さを読まなければならない。それは、語り手が「私」と一体化するという語りの構造によって、表面化しにくい結果となっている。しかし、「私」がどう感じたかよりも、読者に〈故郷〉の荒廃ぶりや旧友の零落ぶりがダイレクトに伝わる仕掛けになっていることを看過すべきではない、と思うのだ。(2014: 151)

『文学教育の転回』の後に書かれた『ナラティブ・リテラシー』のなかで批判されているのは「心情主義」の読みである。登場人物の「私」の心情より、語り手としての「私」が読者に何かを伝えようとする仕掛けは丹藤にとって看過できないところである。言い換えると、語り手としての「私」の機能は「私」の心情を語ることにあらず、それを通して何かを読者に伝えようとするということにある。たとえば、語り手にとって関土の現状を語ることを通して辛亥革命以後の中国の「政治や体制が悪い」(2014: 151)ということを告発することができる。このような発想は藤井省三の『故郷』論のなかで指摘されている「作家の戦略」と重なる。

それに対して田中の言っている〈機能としての語り〉は一人称小説の場合、登場人物でありながら、生身の語り手の「私」の語りではなく、語り手としての「私」の認識を超えている地平にある〈語り手〉である。丹藤の言っている語り手ではなく、〈機能としての語り手〉こそ登場人物としての「私」の視点にそって見られない関土などの対象人物の内面を語るができる。言い換えると、視点人物

と対象人物の了解不能の《他者》関係を語るのが《機能としての語り手》の機能である。当然ながら、ここで反映論と違う世界観認識、つまり《第三項》論のような世界観認識が要請される。

3. 2. 2. ソシュールの言語学についての理解は適切ではない

丹藤は「言語論的転回」を裏付けるものとしてソシュールの言語学を言及したが、しかしそれについての理解は適切ではない。

言語実体論は、二〇世紀に入り見直しを迫られた。フェルディナン・ド・ソシュールを嚆矢とする記号論やルトヴィヒ・ウイトゲンシュタインらによる分析哲学は、言語をそのような道具とする見方を否定した。いわゆる言語論的転回である。言語と指示対象は一对一の関係にない。言葉が指し示すのは、むしろ他の言葉である。それゆえ、言語論的転回では、現実の世界があつて言葉があるのではなく、言葉が世界を構成しているとされる。われわれは言葉によつて世界を分節化し構造化しているのである。(2018: 17)

右の引用に書いてある「言葉が指し示すのは、むしろ他の言葉である」はソシュールの言語学というより、バルトのエッセイ「作者の死」に由来しているものであろう。トドロフは『越境者の思想』のなかで、バルトの「奇説」を例証するためにこの文章を使ったことがある(2006: 140)。

松澤和宏のソシュール研究によると、丹藤に理解されたのは二〇世紀六十年代以後のフランスの構造主義に歪曲されたソシュールである。そもそも丹藤によく参照とされた『一般言語学講義』はソシュール自身のもではなく、ソシュールの二人の弟子によつての杜撰な産物である。丹藤はソシュールの言語学に依拠して言語道具論を退けて、その代わりに言語決定論を強調しているが、しかし「言語道具論」と言語決定論は、同じ一枚の硬貨の裏表である(「ソシュールの恣意性の深淵とラングの言語学」(2018: 88)と松澤和宏は喝破する。

松澤によると、二〇世紀におけるソシュール受容に二つのドクサがある。一つはソシュールを《ラングの言語学者》とし、もう一つはソシュールを言語決定論の提唱者とする(2018: 7-8)。「言語と指示対象は一对一の関係にない。言葉が指し示すのは、むしろ他の言葉である」という丹藤の文学教育論に踏まえられている論点はこのような二つのドクサと無関係ではない。

いうまでもなく、このような言語決定論は《第三項》論にも認められない。《第三項》論に強調されているのは、言語は指示対象を指し示さないということではなく、言語は「客体の事物そのもの、第三項」を指さないとということである(田

中2013: 86)。それを前提にして、世界は言語で出来ているものである。つまり、主体は主体自身の言葉によつて紡ぎだされた世界に生きている。

かくしてバルト思想を信じて、そこに理論根拠を求めた丹藤はバルト思想を信じてなくてバルトから離れたトドロフと同じく、ポストモダンを通過できなかった。丹藤は彼の著作のなかで、トドロフの文学教育論に対しての批判を認めた(2018: 86)、結局、トドロフに批判される文学教育論のようなものを書いた。その主な原因は丹藤自身が彼の文学教育論に前提された《言語論的転回》を踏み外してしまつたことに求められる。

ポストモダンからモダンに戻ってきたトドロフと違って、丹藤はまだポストモダンのなかで迷走している。それゆえに、彼の文学教育論から一貫性のある核心思想が読み取れにくいどころか、矛盾する記述が却つて多く見られる。たとえば、「語り—語られる関係、語ることと語られることの相関関係を読むことは、テクストを読み深めていくうえで肝要である」(2018: 24)のような論点—《第三項》論では《語り—語られる》と表記されてある—を強調しながら「走れメロス」の場合、「語り手の文脈からは逸脱した読みも可能であり、かつ意味のあるものとなるだろう」(2018: 23)と述べている。語り手の文脈を逸脱すれば、読者に読まれるのは語られた内容だけであろう。語りの問題はそれによつて疎かにされてしまふ。しかし、田中実は「迂闊な《語り手》」(1986: 134)の《語り—語られる》相関関係に着目して、「走れメロス」における《語り》の「破綻」を強調したのである。

また、核心思想が明確にされていないので、通常の文学概念、歴史概念はそのまま丹藤に踏襲されているのである。《言語論的転回》、あるいは《第三項》論を前提にして文学教育論を展開する以上、それに伴われるのは「文学」、「歴史」についての再定義である。しかし、この再定義を行えたのであれば、「故郷」(魯迅・中三教材)を授業するのに、辛亥革命という時代背景や作者魯迅の伝記的事実が引き合いに出されたりするが、それは社会科学の授業であつて、国語の授業ではないことは自明である(2018: 19)とこのような主張は不可能になるはずである。前述したように、トドロフにおいては、世界観認識における転換が遂げられなかったので、「文学」についての定義は中途半端に終わり、通常の歴史概念のなかで「広義」の文学を考えたのである。

4. 改めて魯迅『故郷』を読む

さて、《第三項》論に求められる読み方で読むと、どのような新しい文学教育

が考えられるのか。具体的に言えば、その新しさは生徒に「読まれる対象」とは何かということにかかわっている。(第三項)論を前提しての読む行為ならば、限られる空間のなかで、限られる情報が洗い出されれば終わることではない。生徒にとつて、読まれる対象は生徒の読む行為のため常に更新されつつあるものである。以下は、魯迅『故郷』に描かれている少年閩土の世界に絞って、どのような豊穠な読まれる対象が探れるのか見てみよう。まず、二人の三十年後の再会場面から始めよう。以下は竹内好の旧訳からの引用である。

「旦那様」

私は身ぶるいしたような気がした。私たちの間に、すでに悲しむべき厚い壁が築かれたことをさどつた。私は、口にする言葉も失った。(1955: 92)

「～をさどつた」という部分は、藤井省三に「僕にもわかつた」(2009: 62)と訳されている。中国語原文「我就知道」と合わせて読めば、いずれも的確な翻訳だといえる。「就」は案の定、予測した通りという意味あいがある。つまり、閩土に「旦那様」と呼ばれることは「私」にとつて意外なことではない。それにもかかわらず、そのように呼ばれた瞬間、「私は身ぶるいしたような気がした」。「ような気がした」が示しているように、「私」はなぜ身ぶるいをしたのかという自分自身の反応を信じなかつた。ここであらわにされたのは、田中実の『故郷』論に指摘された「私」の「多層的意識構造」である。それについて「現実」を熟知し、かつこの「現実」を決して受け入れることをしないと「私」の特異性があります(2014: 25)と田中は述べている。普段の日常生活のなかで「私」は「壁」を認めないし、それを超えようと考えている。一方、現実にある「壁」を熟知しているが、それが普段の考えに無意識のエリアに深く抑圧されている。ところが、「私」の意識と無意識は閩土に「旦那様」と呼ばれた瞬間、同時にあらわになってしまった。

「悲しむべき厚い壁」は地主の息子の「私」と農民の息子の閩土との間にある階級差に由来しているものでもなければ、それが階級差によって固定されるべきものでもない。『呐喊・自序』に書いてある「鉄の部屋」と同じく、「壁」によって解き明かされているのは、われわれの世界を捉えるメカニズムである。この「壁」、あるいは「鉄の部屋」はどうやって「私」に超えられたのか、田中は次のように記している。

末尾、「窓はひとつもないし、こわすことも絶対にでき」ない「鉄の部屋」、これまた相対主義の認識の光に晒されると、虚構の鉄壁の構築物、実体なき

夢まぼろしに過ぎなかつたのです。(2013: 48)

地上の一切の観念の残滓を全て葬り去る(語り手)はこの世の「悲しむべき厚い壁」を末尾、風のように超えます。閩土が消えて「希望」が現れるのです。(2013: 49)

世界を捉えるたびに「壁」が生じる。「壁」がなければ、捉えられる世界が形とならない。「透徹した相対主義者」(2013: 48)になった「私」は自分の手で作つた「悲しむべき厚い壁」を、また自分の手で外すことができた。このような世界を捉えるメカニズムと「故郷」の終わりに書かれている「希望」の論理は軌を一にしている。

そもそも、三十年前にこの「壁」を外すことができたので、少年閩土は「私」に自由自在に忘我的に夏の海辺の風景を語りえたのではないか。

「今は寒くてダメだが、夏になったら、おいらのところへ来るといいや。おいらは昼のうちには海岸へ貝拾いに行くんだ。赤いのもあるし、青いのもあるし」「鬼おそれ」もあるし「観音様の手」もあるよ。晩には父ちゃんといっしょに西瓜の番をしに行くのさ。おまえも行かない」(1955: 87)。

当然ながらこれは少年閩土の言葉が「私」の文字に転写されたものである。中国語原文も同じであるが、竹内の新訳より、この旧訳のほうを朗読すればリズムに強く感じられる。このような音楽の世界、この世にいるかどうかさだかでない動物が生きている海辺に「私」は魅了されている。三十年間この海辺の景色が「紺碧の空に、一輪の金色の丸い月がかかっている」(1955: 85)という「昼間と夜とが一つになった世界」(2010: 12)、つまりこの世にありえないパラレルワールドとともに「私」の脳裡に残っている。それによって物語られるのは、「私」にとつて少年閩土との出会いはどんな衝撃なことであつたのかということである。

少年閩土と初対面の時間閩土は次から次へと喋っていたが、「私」は聞く場しかなかった。しかし、三十年ぶりに再会した後、「私は、彼の暮らし向きを尋ねてみた。彼は、頭を振るばかりであつた」(1955: 93)とあるように「私」は聞かなければ閩土は沈黙のままであつた。閩土は「私」のような「透徹した相対主義者」にならなかつたが、「私」と同じく「多層的意識構造」を持っている。ただし、「私」はあくまでもそのなかの一つの「層」しか見えなかつた。その「多層的意識構造」を語っているのは(機能としての語り手)である。三十年前閩土自身に語られた海辺の世界は彼の「多層的意識構造」の底辺に眠っている。

少年閩土は〈第三項〉論についての知識をもっていないが、〈第三項〉論に突き動かされて、蛙のように二本の脚がある「跳ね魚」、「私」にとって造語をもって記述しなければならない「チャー」のような動物が生きている世界を自由自在に語ることができたのではないか。その世界は「現実」にあるかどうかというより、少年閩土にとつてはそれが「真実」であった。それは辞書が辞書にない言葉によって相対化されている世界であり、音楽の世界である。

このような〈第三項〉論に示されている方向に向かって『故郷』を読むと、読まれる空間は無限大である。特に、大人より、〈第三項〉論に入りやすい少年あるいは子供に〈第三項〉論に突き動かされた少年閩土の世界を読ませれば、なおさらのことであろう。

5. 結びに代えて

今日の我々にとつて、混在した世界観認識を分離するのが急務であろう。そのために、まず反映論と混在している〈第三項〉論とは何かということを理解しなければならぬ。本稿で例として分析されたトドロフと丹藤博文はいずれも世界観認識における転換はなかつたので、ポストモダンにぶつかって、改めてモダンに撥ね返されたのである。その意味で、彼らになされた文学教育に対する批判は文学のためになるとは言い難い。

いわゆるポストモダン思想家のなかにバルトのような思想家はまたいる。また、本論では具体的に分析できなかったが、ベンヤミンのような思想家は、むしろ〈第三項〉論のような世界観認識を抱えて出発し、その後、時代の風潮に合わせて、反映論に傾斜しつつあった。いずれにせよ、〈第三項〉論と合わせて読めば、このような思想家たちの思想発展は具体的にどのようなポスト・ポストモダンに到達したのか、あるいはどのようにポスト・ポストモダンから離れたのかということが一目瞭然である。

文学教室の生徒たちの読みは「素朴」に思われるかもしれないが、原理においてバルトやベンヤミンなどの思想家に問われた核心問題つまり世界とは何かというに通じている。この両者の間にある水路を明確にするのは文学教育を行う国語教員の責務であろう。その意味で、文学教室での国語教員は単に教えているのではなく、原理的に教わっていることもありうる。それがこれからの文学研究と文学教育との交差研究の徹底化へのための然るべき姿であろう。

引用参考文献

- 田中実 (1996) 『小説の力』大修館書店
田中実 (1995) 『読みのアナーキーを超えて』右文書院
田中実須貝千里編 (1999) 『新しい作品論』へ〈新しい教材論 へ1〉右文書院
田中実須貝千里編 (2001a) 『文学の力×教材の力 理論編』教育出版
田中実須貝千里編 (2001b) 『文学の力×教材の力 中学校編3年』教育出版
田中実 (2013) 『奇跡の名作、魯迅『故郷』の力——大森哲学との出会い、多層的意識構造のなかの〈語り手〉——』『日本文学』2013年8月号
田中実 (2014) 『続〈主体〉の構築 魯迅の『故郷』再々論』『国語教育思想研究』国語教育思想研究会、2014年第8号
田中実 (2018) 『近代小説』の神髄は不条理、概念としての〈第三項〉がこれを拓く— 鷗外初期三部作を例にして—』『日本文学』2018年8月号
丹藤博文 (2018) 『ナラティブ・リテラシー』溪水社
丹藤博文 (2014) 『文学教育の転回』教育出版
トドロフ、ツヴェタン著、(1978) 『詩学— フランソワ・ヴァール他著、渡辺一民他訳』『構造主義 言語学・詩学・人類学・精神分析学・哲学』筑摩書房所収
トドロフ、ツヴェタン著、小野潮訳 (2006) 『越境者の思想』法政大学出版社
トドロフ、ツヴェタン著、小野潮訳 (2009) 『文学が脅かされている 付・現代批評家論五編』法政大学出版社
中村龍一他 (2010) 『座談会『故郷』の〈文脈〉を掘り起こす』『日本文学』59(8)
バルト、ロラン著、花輪光訳 (1979) 『物語の構造分析』みすず書房
バルト、ロラン著、花輪光訳 (1997) 『明るい部屋』みすず書房、新装版
バルト、ロラン著、森本和夫、林好雄訳 (1999) 『エクリチュールの零度』ちくま学芸文庫
バルト、ロラン著、野村正人訳 (2006) 『ロラン・バルト著作集6 テクスト理論の愉しみ 1965 - 1970』みすず書房
松澤和宏編 (2018) 『21世紀のソシユール』水声社
リオタール、ジャン＝フランソワ著、小林康夫訳 (1985) 『ポスト・モダンの条件』書肆風の薔薇
魯迅著、竹内好訳 (1955) 『阿Q正伝・狂人日記』岩波文庫
魯迅著、藤井省三訳 (2009) 『故郷／阿Q正伝』光文社古典新訳文庫

Coexistence and Separation of Worldview: The Thoroughness of the Cross-study
between Literature Study and Literature Education Study

Li Yonghua

Abstract: Postmodern is (re) defined as a coexistence of two types of worldview perceptions: materialism reflection theory and the third term theory, which is sung by Tanaka Minoru. In the development of Roland Barthes' thought, the essay "*The Death of the Author*" and "*From work to Text*" can be considered as Barthes' postmodern. T. Todorov of France and Tando Hirofumi of Japan who criticized the present literary education failed to catch Barthes' thought and could not pass postmodern. Therefore, it should be reconsidered whether literary education criticism made by them is valid. At the end of this paper, I would like to show the appropriate reading of the future cross-research between literature study and literature education study by reading Lu Xun's "*Kokyo*" in a reading required by post-postmodern thought.

Key words: postmodern, the "third term", modern writer, the linguistic turn, Lu Xun's "*Kokyo*"
キーワード：ポストモダン、〈第三項〉、現代の書き手、言語論的転回、魯迅の『故郷』